

ソロモン諸島研修旅行に参加して

新潟県郷友会 山田 フヨ

海ゆかば 水漬く屍 山ゆかば 草むす屍
大君の邊にこそ死なぬ かえりみはせじ

詞は万葉集にある大伴家持の歌から採られています。

神武天皇から万世一系の繋がりである天皇陛下は、日本国にとっての背骨であり日本人の愛の糸、奈良時代の歌詠みから今も変わらずに大君であります。

旅行中に宮城県郷友会 S さんのピッチで何回も「海ゆかば」を歌って覚えてしまいました。

平成 28 年 11 月 5 日成田空港 21 時 05 分発ニューギニア航空機で、パプアニューギニアの首都ポートモレスビーに飛び、乗り継いでガダルカナル島ホニアラへ到着しました。

機中 9 時間、乗り継ぎ待ち 5 時間、時差 2 時間、旅行は体力と気力があってこそ動けるうちです。

行くなら今でしようの勢いで参加しました。

余談ですが 20 年以上前に『パプア君』の漫画がありました。

南国で一人暮らす少年の物語で、動物の友達がたくさんいてコメディ漫画でした。

パプアニューギニアと聞いて思い出してしまいました。

昨年のパラオ諸島研修旅行に引き続き、私は 2 回目の参加でした。

2 回目というのは、その前年に新潟県郷友会を再度立ち上げ、機関紙「郷友」の購読を開始し、研修旅行があることを初めて知ったからです。

今回は寺島会長や昨年もご一緒いただいた宮城県郷友会の皆さん・添乗員の古澤さんと顔見知りの方々が多くて心強かったですし、また初顔合わせの方々も優しい方ばかりで本当に楽しい旅行となりました。

この場をおかりして誠にありがとうございました。

さて、ソロモン諸島の国旗には 5 つの星があり、構成する大きな島の 5 島を表していますが、実際に住民が生活している島の数は 350 です。

島毎に部族が違い対立や争いも過去にあり、オーストラリアやニュージーランドから治安維持の支援もあったようです。

地理的にソロモン諸島に属するブーゲンビル島（パプアニューギニア領）付近で夫のおじさんが戦死したと聞いていたので是非行ってみたいと思っていました。夫は参加せず「俺の分も線香をあげてきて」と会社へ。

ブーゲンビリアの花を知っていますか。

ちなみに花言葉は「情熱」で熱帯雨林に多く生息していますが、ブーゲンビル島と深い関係はありませんでした。（残念）

ソロモン諸島の観光ではダイビングやサーフィンが盛んです。

パラオと同じでガダルカナル島も大変親日です。



パラオでは天皇陛下にペリリュウ島のご案内をされた現地の日本人（パラオで幾つかの事業をされている社長さんです）が私たちのガイドをしてくれました。

彼は長く滞在しパラオの歴史を詳しく覚えていて、私はず〜っと「すごい！」と感心していましたが、たくさん教えていただいたのに覚えていられないこの私の現実。（残念でなりません）

その彼に負けず劣らない北野建設のエンジニアNさん、これまた「すごい！」青年でガダルカナルを語らせたなら右に出る人はいないのではと思いました。どこ出身のどの部隊がどのルートで進んだ等よく勉強されていて、実際に島内をあちらこちらと歩いて地理にも詳しく、不思議な体験も数多くされておられるそうです。

遺骨収集にも協力されていて、平成26年9月15日（月）宇都隆外務大臣政務官率いる我が日本海軍練習艦隊が、ソロモン諸島において戦没者遺骨収集帰還

事業関連式典のため日の丸をはためかせソロモンの海に姿を現した時には涙が出たと話していました。

かの地に永く眠っておられた皆様もきっときっと同じだったのではないのでしょうか。

今年もまたご遺骨がご帰還されます。

海軍の皆さんは21日（日）まで滞在されて、日本平和慰霊公苑で慰霊祭を行いました。

私たちが同じく宮城県郷友会のメンバーに住職さんがおられて、寺島会長からお言葉をいただいた後お経をあげてもらって慰霊祭を行いました。

この島では、戦死・戦傷死・戦病死・行方不明者が合わせて21,138名と記録されています。

ご遺骨収集作業は現在も継続中ですが、日の丸はためく艦船に大勢の皆様が乗り込まれたであろうと想像しています。



私たちはNさんから、ムカデ高知、第二師団慰霊碑、川口支隊慰霊碑、米国記念碑、西部地区戦跡、テレビーチ、レッドビーチ一木支隊記念碑、アリゲータークリーク、バラナ村、岡部隊慰霊碑、タンベア二師団慰霊碑、エスペランス岬、吉森戦争記念碑、ビル村戦争博物館（ここではなぜか大雨となり、土砂降りの中で説明を聞きました。

主に米国の戦闘機が空・陸たくさんありました）、潜水艦鬼怒川丸（船体が海岸近くに見えました）、丸山道入口、重砲連隊慰霊碑、903高地、17軍指令所、中央市場、ソロモン博物館などなどたくさん案内していただきました。

ガダルカナル島は愛知県や千葉県より少し大きい位の面積ですが、2,000m以上の高い山々あり、尖った山あり谷ありの起伏が激しかったり、また川も数多く、草原かと思えば密林だったり、島の地形・特性は行って見て驚きの連続でした。

実際に見てみないとわかりませんね。

これは参加者全員が認識したところでした。

現地を知らずに遠く離れたところで作戦をたてれば困るのは派遣された人たちですが、そんな中で日本の兵隊さんたちは本当によく頑張ってくださいと感謝の気持ちしかありません。

パラオにも様々なもの（戦闘機の残骸、錆びた戦車、重火器など）が残っていましたが、ガダルカナル島には加えて生活の小さな品々（手榴弾、弾薬、飯盒、ねじ、歯ブラシ、お酒の瓶、ペン、水筒、薬、メスシリンダー等々）も本当にたくさん残されていて現地の皆さんが拾い集めてくださっていました。

70年以上前にこの地においてここで闘っていたという実感がふつふつと湧いてきました。

私はそんな現地の皆さんに感謝の気持ちでお土産をあげてしまいましたが、Nさんいわく「彼らは日本人が来ると何かもらえると出して来る」とのこと。その通りでした。



島の奥地を案内してもらって、旧約聖書の天地創造にあるエデンの園はこんな感じなのだろうと納得しました。

お腹が空けば自然の恵み（タロイモ、バナナ、パイナップル、マンゴーなどなど）をいただき、日の出とともに起き日が沈めば休み競争もありません。

あくせく競って働くこともないでしょう。

そこに欧米人は下心を持ってまず宣教師を送り込み、物を与えキリスト教を与え言いなりにさせて、自分たちの欲しい物を奪い去りました。

これじゃあずる賢い輩に騙されるよなあ、エデンの園の住人は疑ったりしない優しい正直者ですから。

日本でもゴミを捨てる人はいますが、エデンの園にゴミは存在しないのです。食した後の木の実の皮や種は地面に返すのが自然です。そこへ私のような者がプラスチックやナイロンを持ち込み、彼らはいつものように自然へ・・・ところがそれらは自然に返らない物なんです。そしてゴミがそこら中に落ちていました。(申し訳ないです) これは島の奥地の状況です。

ソロモン諸島の土地面積は四国の 1.6 倍位で、2004 年の世銀の調査ではソロモンの総人口は 46 万人。最大の島がガダルカナル島で 6 島のいずれも幅 24～56km、長さが 92～181km で北東から南西に向けて並んでいます。火山列島でもあり地震が多いことでも知られています。急な山の斜面に小さな家がポツポツ建っています。見ていると危なっかしくて N さんに大丈夫ですかと尋ねると「彼らは壊れたらまたすぐに作るから大丈夫です」とのこと。たくましい！自給生活者数は 31 万人で約 4000 の集落があり、英国の統治下にあったことで住民の 95%以上がキリスト教です。南太平洋諸島の中でもソロモンは自然が手付かずで残された、まさに最後の秘境とも言えます。



ホニアラはソロモン諸島の首都であり、「ソロモン諸島」は 1978 年 7 月 7 日英国連邦の一員として独立しました。

日本は独立と同時に日・ソロモン漁業協定、JICA ボランティア派遣など外交関係を樹立してきました。

在ソロモン日本国大使館は、2016 年 1 月 1 日より独立の公館として格上げされ、正式に大使館としての活動を開始し、初代の駐ソロモン日本国大使として木宮憲市氏が着任されました。

お仕事とはいえ前任地チェコのプラハからエデンの園ソロモン諸島にお住まいに

なられ、大使夫人は大きなカルチャーショックとどのように向き合っておいでなのでしょう。

私はそのお話も伺うことができ大変ラッキーでした。

突然でしたが私たちは大使館訪問の機会をいただき、大使夫妻と夕食もご一緒させていただきました。

奥さまが大変素敵な人でその熱く深い会話に引き込まれ、私の生涯で貴重な思い出深い経験になりました。

お話の詳細を記すわけにはいきませんが、クリスマスなどで奥さまがピアノを弾き大使がオペラの舞台も踏んだというその美声で歌を披露されるそうです。

素敵ですね。

そして特筆すべきはお二人共が日本国の防衛に対して強い関心を示しておられて、その考えるところは我が郷友会と同じであると確信したことでした。

いろいろ大変でしょうが頑張ってください。



日本人はなぜこんな遠くまで・・・と考えていたら、「ルーズベルト一族と日本」(谷光太郎著、中央公論新社)の本に出会いました。

ハワイのカラカウア王が来日して、明治天皇に日本人移民を懇望しました。

1890年には12000人を超えるほどになりました。

1893年2月1日ニューヨークタイムズ紙に海軍戦略家マハンの小論が掲載されました。

それは「野蛮な黄色人種(日本)の流れをせきとめるためには、文明海洋国によるハワイ獲得が必要だ。」からハワイを獲り、敵国日本に対して闘いの準備を進めるということ。

英語使用白人種を優先し、ついに1913年「排日法」が成立、1920年には「排日土

地法」「日本人学童隔離法」が、1924年には最悪の「絶対的排日法」がカリフォルニア州議会を通過しました。

日露戦争後、日本人移民排斥運動は激しさを増すばかりでした。

第一次世界大戦が勃発すると英国が参戦、日本は英国に対独宣戦を要請され参戦。そして日本はドイツ領パラオ、マリアナ、カロリン、マーシャル、サモアを委任統治することになりました。

ところがこれらの島々は米領フィリピンと英語使用白人種がいる豪・ニュージーランドの脇腹となります。

米国が日本と対峙した時、日英同盟により後ろから英国にたたかれてはかないません。

何としても日英同盟を廃棄させなければならなかった。

セオドア・ルーズベルトは大西洋岸の主力艦隊を太平洋側に移動させ、海軍の増強を急ぎパナマ運河を完成させました。

私ごときが熟知しておられる諸先輩にいまさら何をほざくかと叱られそうですが、日米開戦の50年近く前から日本に照準を定めて着々と準備していたのかと分ったら、ガダルカナルやペリリュウの闘いも起こるべくして起きた防ぎようの無い戦争だったのだろうかと思った次第です。

最後にお二人の言葉を載せたいと思います。

絶対的排日法が成立した1924年、渋沢栄一さんは「米国は正義の国、人道を重んずる国と年来信じていた。カリフォルニアで排日運動が起こった時も、それは誤解に基づくものと思ったが、自分なりに日米親善に尽力したつもりである。ところが、米人は絶対的排日法を作った。これを見て私は何もかも嫌になった。今まで日米親善に尽力したのは、何だったのか。『神も仏もないのか』という気分になってしまった。こんなことなら、若い頃の攘夷論者だった自分のままでいた方が良かったくらいだ」

昭和天皇は日米戦争の遠因を次のように言及されています。

「この原因を尋ねれば、遠く第一次大戦後の平和条約に伏在している。日本の主張した人種平等案は列国の容認する処とならず、黄白の差別感は依然残存し、加州（カリフォルニア）移民拒否の如きは日本国民を憤慨させるに十分なものである。かかる国民的憤慨を背景にして一度、軍が立ち上った時には、之を抑えることは容易な業ではない」

これがガダルカナルとどう関係しているんだと聞かれたら、日本人は大きな流れの中で南太平洋の島々に多くの人に移り住み、道路を作り、学校を作り、病院を作り、必要ないろんなものを作り、現地の人たちと仲良く暮らしていました。だから

ペリリューもガダルカナルも親日です。ところがなぜか起こるべくして仕掛けられた戦争が起きてしまい、ガダルカナル島は米軍の本格的な反攻の始まりの最初の島になりました。日本人と台湾人は逃げずに勇敢に戦いました。

はて、堅い『郷友』に私の文章を載せて品位を落とさしめないか心配しています。そんなわけで皆様も是非研修旅行にご参加ください。ありがとうございました。